

# お話の調べか話方の研究か（お話漫筆四）

長 尾 豊

## 困る事ふたつ

世の多くのお話口演家が、いかにして巧みに話すべきか、どうしたら聴衆に感動を與へられるかといふ、話法話術の研究にうき身を窶してゐるのを見て、一概に笑ふことは出來ない。専門的な口演家が其の技を磨き、術に勵むのは、まことに結構な事だからである。けれども此の傾向があ話の方面へ入つて來ると、困る事がふたつ許りある。ひとつはさういふ専門家風のお話だけがお話であつて、外のたとへば教室でのお話とか、家庭でのお話とかいふものが考へられないやうに成り、又すべてが専門家風の話方の影響を蒙ることであ

る。影響を蒙るのは差支ないとしても、それのみが話方でありと思ひ、それでなければ、さうしなければお話ではないと間違へるやうになると、きつと「お話の出來ない人」が出て來るだらうと思はれる。教室でのお話とか、家庭でのお話とかいふものは、調べさせへすれば誰にでも出来るもので、専門的な特別の技術を要するものではないと思ふ。モウひとつ困るとは専門的な口演家を見ならつて、其の模倣者追随者達が、争へて話法話術の一端に許り喰りつく結果は、話材に就いての考察があ留守に成り、お話そのものを調べるといふ事が閑却されてしまふ。お話口演家の多くは、「創作」と稱

して自分の考へた話材を口演する。これは創作童話といふものとは全く別なもので、もつと範囲の廣い、或材料を得て来てそれを話のやうにして口演するととある。自己の創意も何にもないものもあれば、又時としてはち話に成つてゐないやうなものもある。それでも話して見て多少面白ければ、つまり聞手が笑つたり、拍手を送つたりなどすれば、「流石は實演家だけあつて話の組立がうまい。」などと褒める人もある。が、そんなものに話の組立などはいくら探しても見附からないのである。

### むづかしい創作

かういふものが「お話」として通用することは天下に悪例をのこし、惡模範を示すことで、甚だ厄介な話である。創作といふことは「つくる」ことである。人は一篇の話でもさう容易に創作する事は出來ない。先づ大抵は昔からある型に依つて、舊い材料を多少新らしくし、現代の物を取り入れた

り、又は自分流にいくらか改めて話直すことに過ぎない。日の下に新らしきものなしとか言ふが、大體お話の型といふものはきまつてゐて、それが幾つかあるだけである。細かく分ければ百幾つに成るが大括みに區別すれば、先づ二三十、大抵のお話は十ぐらゐの型でちやんと分類されてしまふ。其の型の幾分變つたものや、ふたつ以上結び附いたものや、いろ／＼あつて數多く見えるが、お話の數が多いのに比してお話の型の方は、實はそんなにたくさんはないのである。そこで少なくとも舊い型に依らず、昔からあるお話の形を離れた、新型をつくり出すといふ事はむづかしい。決して生易しい仕事ではない。挿へた人が創作だと言つてもそれはよく見ると何所か昔の型に依つたもので、全然新らしい創作ではない。勿論「話」の態をしてゐないものは此限りでないから、所謂創作童話とか藝術童話とかいふ、短篇小説だか散文詩だ

か分らないやうな、「話」でないものはこれには當嵌らない。「話」でないものを書いて創作だと言ふなら、それは通るだらうが、話を書いてこれは創作だと言つても先づ大抵は昔の型に依つた、悪く言へば舊套を脱してゐるものである場合が多い。

創作童話の方は先づ「話」でないのだから好いとしても、實演童話の方ではすぐにお話といふ位だから、話の態を成してゐなければ困るわけである。けれどもこれもお話としては形態も構造もしつかりしてゐるもので、只お話らしい事件の疎漫な連續を身振や聲色でお話らしく聞かせるに過ぎない。

### お話を調べると、調べないと

お話の創作といふものがむづかしいもので、相

當に力量を要する仕事であるとすると、お話を聞かせなければならぬ人は、忽ち材料に困る。力量があつてもなくつても創作らしいことのいける

人はとにかく、さうでない人は、止むを得ず好い加減に片附けてしまふらしい。ところが材料に困つて好い加減に話した癖のついた人は、何を話させても其の好い加減で片附けてしまふ。つまりほんたうにお話が出来ないのである。

昔からある名高いお話、好いお話、面白いお話を話すといふのは、お話本を前へ伏せて置いて、諸記して又あけて読み、クチャ／＼と讀んでは又詣誦するといふやうなやり方では、先づ覺束ない。お話を分解して見て、急所々々を突き止めて、別段骨を折つて覚えるともなく、前後の關係が辿れるやうに成り、其の一一遍分解したものを再構成して話す、其所に創作的な、自分の話方が出来るわけである。

好いお話を分解して、再構成して聞かせることは、お話本の丸諸記でも、一字一句間違はずに昔からある物語を聞手に傳へることでもない。これ

を通つてはじめて獨創的な話方が可能であり、時として其の志さへあればお話創作の方にまで進め

(五〇頁よりつづく)  
堀 僕は二本棒のヒバシからだつたよ。

るのに、はじめから好いお話を採らず、採つても分解もせず、再構成もせず、苦しんで丸譜記を試みたり、あるひは好い加減に押片附けて、材料の

新庄 私共、幼稚園の教生の時に、やつぱりそんなでした。その當時の保育案が残つてをりますわ。

ない時には創作とも何とも名附けやうのない一時のがれをやる人が、ほんたうにち話が出来なくな

金橋 私に描ける繪が四つだけある。その他は何れも描けないけれども、これ丈はうまい。母に教つて、小さい頃描いたその繪です。

るといふのは、ちょっと聞くと不思議のやうにも思はれるが、これは不思議でも何でもない。つまり前者はお話を調べ、後者はお話を調べない、といふだけである。

お話を調べだけが大切で、話方の研究は疎漏でも好いのかと言ふ人があるかも知れないが、話方は其のお話を離れてないわけである。又話方を調べて、お話を通することは出来ないが、お話を調べる事から、それを話す仕方がいくらでも考へられると思ふ。

(先生、即席揮毫をなさる。あり合はせの紙の裏に金のエバーリシャープが一氣に描き出したものは。人物二種、横向きに立つ人と碁盤を囲む二人、何れも當代の子供繪には見ようにも見られぬ文人畫。その次が、蟹。蘭一葉だけ折れて破調の味。それから之れも唐畫風の籠に盛つた果物。)

サア、もうこの邊で閉會にしませう。  
時に、六時。